国語・数学・英語における学業不振児の指導に関する研究（第二報告）

I 研究の目的と指導経過の概要

基礎学力増進委員会

石黒鈞二・加藤十八・新海　寛
丹下省吾・畑　実・兵藤祚夫
平野幸雄・福中康子

この研究の目的と方法については，すでに紀要第1集において第1報告のはじめに述べておいた。つぎに掲げる四つの論文は，第1報告において述べた目的と方法に基づいてなされた研究の報告であるから，これらを十分よく理解するためにはもう一度第1集を開いていただかなければならないのであるが，煩わしさを避けるためその概略を再び次に摘記しておく。

1. 目　的

ここで学業不振児というのは，治療指導上の立場から，(1)一定の学力水準に到達し得ないもの，(2)知能や適性からみて期待される程度の学習成績をおさめ得ないもの，及び(3)学年の平均学力の者に比較して，相対的に著しく劣っているものの総称である。ただし(3)の場合はむしろ見かけの学業不振児あるいは准学業不振児とも考えられるものであるが，学習指導上には重要な問題を多く含んでいるので，ここでは特に治療指導の対象としてとりあげた。

昭和30年度の当附属中学校3年の生徒は，無制限の抽選で入学した者であり，かつ研究学級の要員に該当する者も少数ながら含んでいたので，過去2年間の指導にもかかわらずなお学業不振の症候を示すものが数名あった。そこで学業不振のことに顕著な国語，数学，英語についてだけ，特別な治療学級を編成して指導することとした。少人数の治療学級では指導が徹底しやすいので，学業不振の種々の原因の除去に便利であること，及び集団の内部構造の変化によって学業不振の社会的情緒的原因の制御が可能であることの二つがこの方法をとった主要な理由である。

2. 方　法

治療学級の編成のためには知能性格に関する諸検査及び学習成績を参照することはいうまでもないが，とくに生徒並びに父兄の希望を尊重した。必要あるものが進んで治療学級に所属するように趣旨をよく説明し勧奨したので，適格者を全部含む20名内外の治療学級を編成することができた。この中にはもちろん成績普通のものが含まれているわけである。授業時間数・使用教科書及び進度は普通学級と同じであるが，普通学級では同じ時間内に副読本または問題集を併せて学習することになっている。普通学級と治療学級との間に優劣の対立感情が高まらないように特別な注意を払った。両学級の名称を赤・白（国語と英語は同一学級）および青黄（数学）と名づけたのもこのためである。ここでは白組と黄組が治療学級である。

3. 指導経過の概要

以上が第1報告で述べた目的と方法の概要であるが，これに基づいてなされた指導の経過を簡単に報告しておく。

第1学期のはじめ，4月中は学級の編成替えや諸準備のために費されたので，治療学級の指導を実際にはじめたのは，5月の第1週からであった。5月初旬にはP.T.Aの総会があり，父兄との面

接により治療学級に対する生徒の反響がたしかめられた。出席者に関する限り，すべての父兄がこの指導に賛意を寄せられた。

第1学期末の学習成績はこの指導の成果を検討する第一の機会であった。これによると治療学級所属の生徒は全般的にかなりの向上を示している(註)。しかし治療の対象である学業不振の生徒についてはかなり進歩したものもあるが多くは明瞭な成績向上を示さなかった。ただし学習意欲は一般的に高まったように見受けられたので，そこにわれわれの希望がつなぎとめられた。

夏休の40日間は，自律的な学習の習慣ができていないこれらの生徒にとっては，折角高まった学習意欲を低下させ，第一学期に習得した知識技能を相当程度忘却あるいは衰退させるおそれがある。そこで8月上旬に4日間出校させ，特別に復習を指導した。

第2学期になって9月中旬，治療学級の編成替えをした。成績のかなり向上したものでも普通学級に復帰することを拒み，逆に普通学級からは治療学級に替わることを希望するものが増加した。結局2名が普通学級に帰り，5名が新たに治療学級に入ることを許された。これらはもちろん学業不振児としてではない。

第3学期のはじめ，治療学級を解散するかどうかが問題となった。卒業期を間近かに控えて，このような区別のない学級で最後の2カ月余を過したいと希望するものも二三あったが，大多数はこのまま指導を続けることを望んだので，この指導を卒業まで継続することとした。

卒業前に附属高等学校の入学試験があり，全員が進学を希望したが，選抜試験の結果この中から13名の不合格者を出すこととなった。しかしそれにもかかわらず，卒業時における感想調査では，後に石黒が報告しているように，治療学級の学習に対して全く効果がなかったとするものは1名もなく，わからないとするものがわずかに3名あったほか，すべてが多少ともこの効果を積極的に認めていた。なお附属高等学校に進学できなかった13名も，ことごとく他の公私立高等学校に進学しているのである。

これだけの事実から，治療学級の指導は効果的であったという結論を引き出すのは危険であるが何らかの効果があったと推測することは決して誤りではなかろう。この推測を事実によって裏付けようとするものが，つぎの石黒及び畑の研究報告であるといえよう。もちろんこの二つの報告書は治療学級の積極的な効果だけをクローズアップして見せようとするものではない。このような指導によって得られた効果—積極的・消極的（または否定的)—を明らかにすることによって，学業不振児の治療指導の最善最適の方法を追求すること，これがこの研究の本来のねらいだからである。

兵藤と平野の研究は誤謬分析によって，学習困難点を解明し，治療指導を一そう適切に，かつ能率的にしようとするものである。われわれの治療学級の指導が，単に少人数の集団による指導というに止まるのでなく，このような学習困難の分析とその矯正指導によって支えられていることを知っていただけば幸いである。

ここに報告したところは，なお不十分ではあるが，この方面のわが国における研究は従来決して多いとはいえないので，治療技術の改善進歩に役立つ新資料を加えることになると信ずる。大方諸賢の御批正を賜われば幸いである。

（註）新海寛　数学科能力別指導における学級内の偏向分析（名古屋大学教育学部附属中，高等学校紀要，第1集)，1955，33—34．この中で，第1学期末における数学科学習成績の変動について報告している。